

住民の幸福実感向上を目指す基礎自治体連合
「幸せリーグ」第4回総会

全国につながる

連携の輪

荒川区



「幸せリーグ」第4回総会で西川区長は「ウイン・ウインの関係を築くような連携を考えていきたい」と語った＝2016年6月

幸せリーグでつながる全国の自治体

荒川区は、住民の幸福実感向上を目指す基礎自治体同士が連携する「幸せリーグ」を足掛かりに、全国の自治体との連携を進めています。東京の富を地方に分け与えるという関係ではなく、共存共栄の関係を築くために模索が続いています。

区政は区民を幸せにするシステム

お互いに幸福実感を高める

「区政は区民を幸せにするシステムである」——これは西川太一郎荒川区長の言葉です。東京一極集中で東京に富が集まり、地方からすれば、

東京都民ばかりがいい思いをしていると見えるかもしれません。荒川区民が区政を通じて幸福度を高め、それに呼応するように全国の市町村の住民も幸福度を高めることが出来れば、それこそ本当の意味での全国連携だと言えるのではないでしょうか。

荒川区は2013（平成25）年に西川区長が発起人代表となり、つくば市（茨城県）、京丹後市（京都府）とともに全国の基礎自治体に呼び掛けて「住民の幸福実感向上を目指す基礎自治体連合」（通称「幸せリーグ」）を結成しました。

「幸せリーグ」とは、住民の幸福実感の向上という同じ「志」を共有する基礎自治体同士が連携し、学び合いを通じて政策の互換性を高めて向上させていく取り組みです。

主な活動は、参加自治体の長が一堂に会する「総会」と、参加自治体の実務担当者による「実務者会議」の開催です。実務者会議ではテーマごとにグループに分かれて議論を重ね、総会の場で成果発表を行っています。

2015（平成27）年度からは幸福度に関する議論に加えて、地方創生総合戦略や地域間連携など、新たなテーマについても意見交換を進め、共通の課題の解決に向けた取り組みを進めています。

昨年6月に開かれた「幸せリーグ」第4回総会で、西川区長は「数多くの基礎自治体が連携し、お互いを補



釧路管内の市町村と協力したイベントは大盛況！2016年10月、日暮里駅前イベント広場で

い合いながら、住民の幸福実感の向上につながる施策を生み、地域特性に応じてアレンジすることが重要で。さらに、このネットワークを活用し、各自治体を持つ豊かな自然や固有の文化、技術力、集客力、消費力、情報発信力などを相互に活用するワイン・ワインの関係を築くような連携を考えていきたいと思えます」とあいさつしました。

「幸せリーグ」の参加自治体は昨

年（11月25日現在）、99自治体になりました。特別区はごも多くの交流自治体を持っていますが、同じ志を持つ100近い自治体によるネットワークを形成するところが荒川区ならではのユニークな取り組みといえるでしょう。

北海道町村会との連携

こうした幸せリーグを通じて培った参加自治体との関係は、特別区長

会が実施する「全国連携プロジェクト」を活用してさらに深まりつつあります。

2015年秋、特別区と北海道町村会との連携事業として始まった「北海道くしろ旬！秋の味覚市」。昨年は10月15日・16日の2日間、日暮里駅前のイベント広場で開催され

ました。釧路管内8市町村（釧路市、釧路町、厚岸町、浜中町、標茶町、弟子屈町、鶴居村、白糠町）と協力し、サンマやサバ、ツブ貝など新鮮な魚介類を中心に釧路の特産品が並びました。

特に実演販売する「星空の黒牛」の鉄板焼き、花咲ガニのてっぽう汁、焼き灯台ツブなど、新鮮で希少な釧路の食材は、行列が出来るほどの人気でした。また、たらこやいくら醤油漬け等の定番の人気商品から、昆布加工品、チーズ・ヨーグルトなどの乳製品、釧路ブランド「釧鯖（せんさば）の一夜干し」など、知る人ぞ知る逸品が用意されました。

先着イベントとして、北海道産ジャガイモの詰め放題（100円）も行われ、あつという間に売り切れしてしまいました。

特別区長会会長でもある西川区長は、イベントのあいさつで「ともに発展できるワイン・ワインの関係を築いていきましょう」と語りました。日暮里駅は、JR線や京成線、日暮里・舎人ライナーが交わる一大ターミナル駅ですが、当日の来場者の半分以上は区外からのお客さんでした。このイベントは、日暮里の街の知名度を上げるきっかけにもなったようです。

また、来場者に北海道の特産品や観光資源を楽しんでもらうだけでなく、釧路の生産者に実際に都会で商品を売る体験をしてもらいたいという狙いもあります。日暮里のまちおこしにとつても、会場を訪れた来場者にとつても、そして、そこで新鮮な食材を提供する生産者にとつても、価値のあるイベントとなったようです。

釧路管内の自治体のうち、釧路市、弟子屈町、鶴居村、白糠町は幸せリーグの参加自治体でもあります。白糠町の棚野孝夫町長は、北海道町村会の会長です。荒川区が幸せリーグで培った関係がここでも活用されています。

荒川区の小学生が広尾町で漁村体験

幸せリーグから広がる

北海道広尾町も、幸せリーグの一員です。昨年8月、荒川区の子どもたちが北海道広尾町の漁師の「ありのままの生活」を体験する漁村ホームステイを行いました。

区立尾久西小学校の5年生74人が2泊3日で、同町内の漁業者の自宅にホームステイし、昆布干しなどの生産現場を体験しました。都会っ子たちにとっては、本物の漁師の生活を間近に体験でき、最高の思い出になったことでしょう。

11月19日と20日には、「北海道十勝広尾町フェア」が日暮里駅前イベント広場で開催されました。水揚げ量日本一を誇る本ししやもの唐揚げ、本ししやもを使用したコロッケ「しやロツケ」、十勝あおぞら牛串焼きなどの実演販売に加え、広尾産昆布つかみ取りで大いに盛り上がりました。また、漁村ホームステイに参加した子どもたちの様子を伝えるパネル展示や動画の上映も行われまし



ツブ貝の実演販売も行われた北海道十勝広尾町フェア＝2016年11月、日暮里駅前イベント広場で



た。

荒川区では、ほかに「全国連携プロジェクト」を活用したイベントが行われています。昨年5月、あらかわ遊園で開催された子ども向け雪遊びイベント「雪であそぼう」で使われた雪は、遠路はるばる岩手県から運ばれたものです。幸せリーグの参加自治体で、特別区の全国連携プロジェクトに賛同した岩手県北上市と西和賀町の協力によるものでした。当日は、たくさん子どもたちがそりすべりや雪遊びのコーナーで夢中になって遊びました。

また、東北六魂祭を秋田で開催した縁で、8月に国内で先進的な英語



はるばる岩手県から運ばれた雪で遊ぶ子どもたち＝2016年5月、あらかわ遊園で

教育を行っている国際教養大学（秋田市）の「イングリッシュ・ビレッジ」に荒川区内の中学生30人が参加し、「中学生ワールドスクール」を実施しました。さらに、今年は、秋田の竿燈祭りをあらかわ遊園でナイター開催する計画も進んでいます。

区民も納得できる取り組みに

真の地方自治のためには、自治体同士が対立し、財源を奪い合うのではなく、東京を含む全国の各地域がともに発展・成長し、共存共栄を図っていくことが重要です。

「住民の幸福実感向上」から始まった幸せリーグは、都市と地方との対立構図を乗り越えて、全国各地域の共存共栄の関係を築く土台となっています。

地方だけではなく区民の利益にもつながる全国連携でなければ、区民の納得は得られません。どうしたら住民の幸福実感を向上できるか。幸せリーグはここから始まった取り組みですが、全国連携という新たな命題の下で住民の幸せを全国に広げようという新しい段階へと移りつつあるようです。